

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第2章「1号機爆発」

3月12日午後、福島第一原発1号

機では格納容器の圧力が高止まりし

ていた。このままでは格納容器が損

傷して大量の放射性物質が拡散して

しまつ。何とかして格納容器から蒸

気を放出するベントを成功させなければならぬ。中央制御室の当直長

伊沢郁夫(52)は最後の賭けに出ようとしていた。

Ⅱ

ベントへ最後の賭け

の突入を決断したのだ。現場の線量

はさらに高くなっている恐れがあ

る。しかし全力疾走で弁までたどり

つき、開けた後に全力で戻れば、被

ばくはある程度抑えられるはずだ。

排気筒(高さ約1.2m)は原子

炉建屋の西側にあり、格納容器と

「排気筒に煙」で断念

がる当直長のホットライン(専用

電話)が鳴った。

「スタック(排気筒)から白い煙

が出てぞ」

排気筒(高さ約1.2m)は原子

炉建屋の西側にあり、格納容器と

この時の状況を作業管理グループ

「白い煙…」

伊沢はうつろふと、何かに思

い当たったように目を見開いた。

「止める！」

それは制御室にいた運転員たちが

だ。1号機原子炉建屋西側の大物搬

入口にトラックで可搬式の空気圧縮

機を持ち込み、目標となる弁につな

が全く別の方法でベントを試みてい

実はこのころ、対策本部の復旧班

班が原子炉建屋に入る前に追いつ



福島第一原発1、2号機の排気筒(中央手前)＝2013年8月(東京電力提供)

班が原子炉建屋に入る前に追いつ

1 原発を確実に廃炉にする